

第2分科会 老いに寄り添う

高齢化に伴う 知的障害のある人たちの 生活上の課題と支援のあり方



武庫川女子大学

武庫川女子大学短期大学部 / 武庫川女子大学大学院

文学部心理・社会福祉学科 教授 松端 克文

知的障害者の最期 みとり「手を握って見送りたい」

知的障害がある男女5人が暮らすグループホーム「森の泉1」（横浜市）の一室。ベッドに横たわる原口由美子さんを、ホームのスタッフや仲間、訪問看護師らが見守っていた。副代表の桑原博子さん（69）が原口さんの体を抱きかかえ、「由美ちゃん、由美ちゃん」と語りかける。

弟の清之さん（59）夫妻が駆けつけた11分後、ふー、と息をして、眠るように亡くなった。小さな体は桑原さんに抱かれ、細い手は仲間の手につながれて。昨年7月22日午後2時9分、享年65歳。老衰だった。

清之さんは、「姉は幸せだったと思います。ありがとうございます」と穏やかな表情で言った。病院に移っての延命治療はせず、16年暮らした「家」で、なじみの人々にみとってもらうのが一番の幸せ——。家族も望んだホームでの大往生だった。

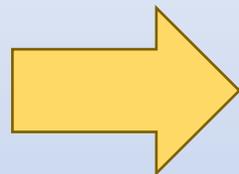
原口さんは養護学校高等部を卒業後、クリーニング作業などに就いたが、両親が高齢になったこともあり、38歳から知的障害者の入所施設（定員70人）で暮らし始めた。48歳の時、少人数で手厚いケアを受けやすい、この定員5人のグループホームに移った。（2019年3月1日付『朝日新聞』）

これまでの障害者福祉

家族
による
扶養

専業主婦

代替



施設入所
による
支援
入院

「親亡き後」の保障

企業
における
安定した
雇用

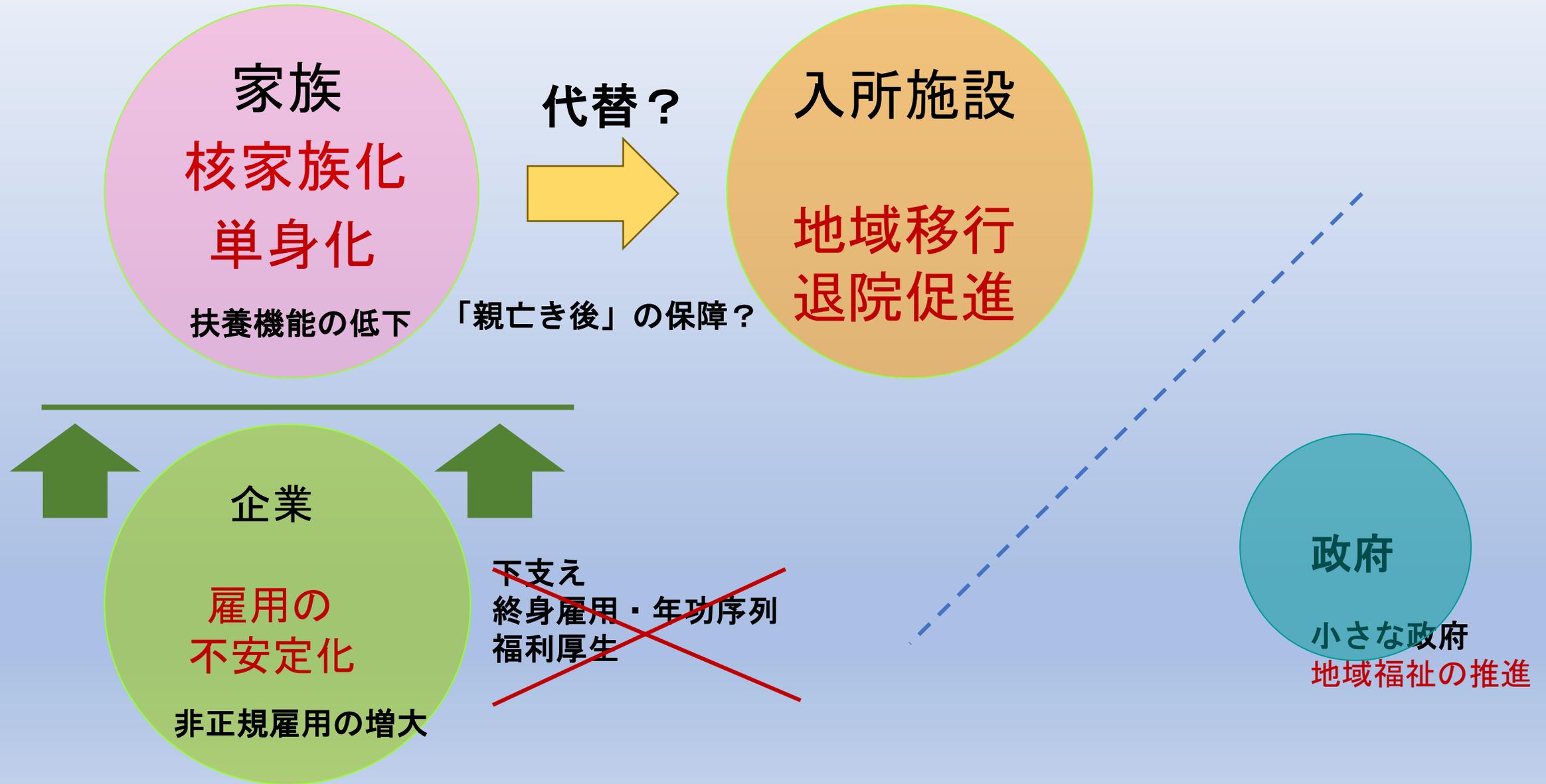
男性働き手モデル

下支え
終身雇用・年功序列
福利厚生

政府

小さな政府
施設中心の福祉

社会状況の変化



身体介護の必要性（心身機能の低下）

図表 1 年齢階層別／身体機能の自立度

年齢別		身体機能の自立度					合計
		特に身体機能に問題はない	何らかの身体機能の障害等を有するが、日常生活はほぼ自立しており独力で外出する	屋内での生活はおおむね自立しているが、介助なしには外出できない	屋内での生活は何らかの介助を必要とし、日中もベッドの上での生活が主であるが、座位を保つ	1日中ベッドの上で過ごし、排泄、食事、着替えにも介助を要する	
40 64	人数	3	1	7	3	0	14
	%	6.5%	2.2%	15.2%	6.5%	0.0%	30.4%
65 74	人数	3	0	11	3	2	19
	%	6.5%	0.0%	23.9%	6.5%	4.3%	41.3%
75 	人数	2	0	5	5	1	13
	%	4.3%	0.0%	10.9%	10.9%	2.2%	28.3%
合計	人数	8	1	23	11	3	46
	%	17.4%	2.2%	50.0%	23.9%	6.5%	100.0%

大阪府下にある障害者入所支援施設における実態調査より 2015年、植田

食事の配慮

図表2 年齢階層別／食事形態

年齢別		食事				合計
		普通食を摂取できる	刻み食であれば摂取できる	ソフト食、ゼリー食、ムース食等であれば摂取できる	ミキサー食であれば摂取できる	
40 64	人数	5	7	0	2	14
	%	10.9%	15.2%	0.0%	4.3%	30.4%
65 74	人数	5	11	2	1	19
	%	10.9%	23.9%	4.3%	2.2%	41.3%
75 	人数	3	8	1	1	13
	%	6.5%	17.4%	2.2%	2.2%	28.3%
合計	人数	13	26	3	4	46
	%	28.3%	56.5%	6.5%	8.7%	100.0%

大阪府下にある障害者入所支援施設における実態調査より 2015年、植田

(植田章2016「知的障害者の加齢化の特徴と支援課題についての検討」『福祉教育開発センター紀要』第13号)

利用者の高齢化に伴う健康面・安全面の配慮

- 健康面 & 医療面（医療的ケア）の配慮
- 介護機能
- 環境整備

...職員配置、医療機関との連携

日中活動のプログラムの見直しなど

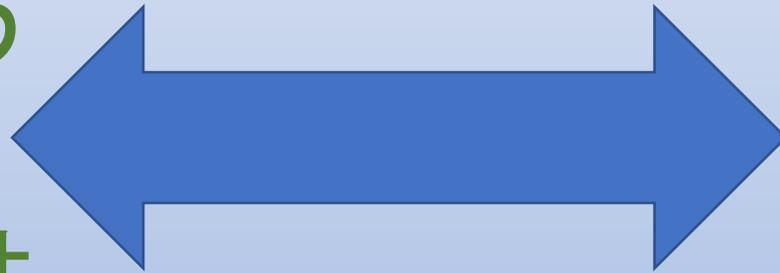
...

本人の「納得」と

「あたり前」の生

施設職員のもつべき専門性

本人と
向き合う
関係なかでの
専門性



あたり前の
生活環境
を整える専
門性

地域福祉と支援の機能

くらしをまもる機能

地域支援＝コミュニティワーク
コミュニティオーガナイズング



個別支援＝相談支援

つながりをつくる機能
(地域を変える)

本人と向き合う関係なかでの専門性

・意思決定支援

意思決定支援とは、自ら意思を決定することに困難を抱える障害者が、日常生活や社会生活に関して自らの意思が反映された生活を送ることができるように、可能な限り本人が自ら意思決定できるよう支援し、本人の意思の確認や意思及び選好を推定し、支援を尽くしても本人の意思及び選好の推定が困難な場合には、最後の手段として本人の最善の利益を検討するために事業者の職員が行う支援の行為及び仕組みをいう。

(厚生労働省省社会・援護局 障害保健福祉部長 2017「障害福祉サービスの利用等にあたっての意思決定支援ガイドラインについて」)

意思決定支援のプロセス

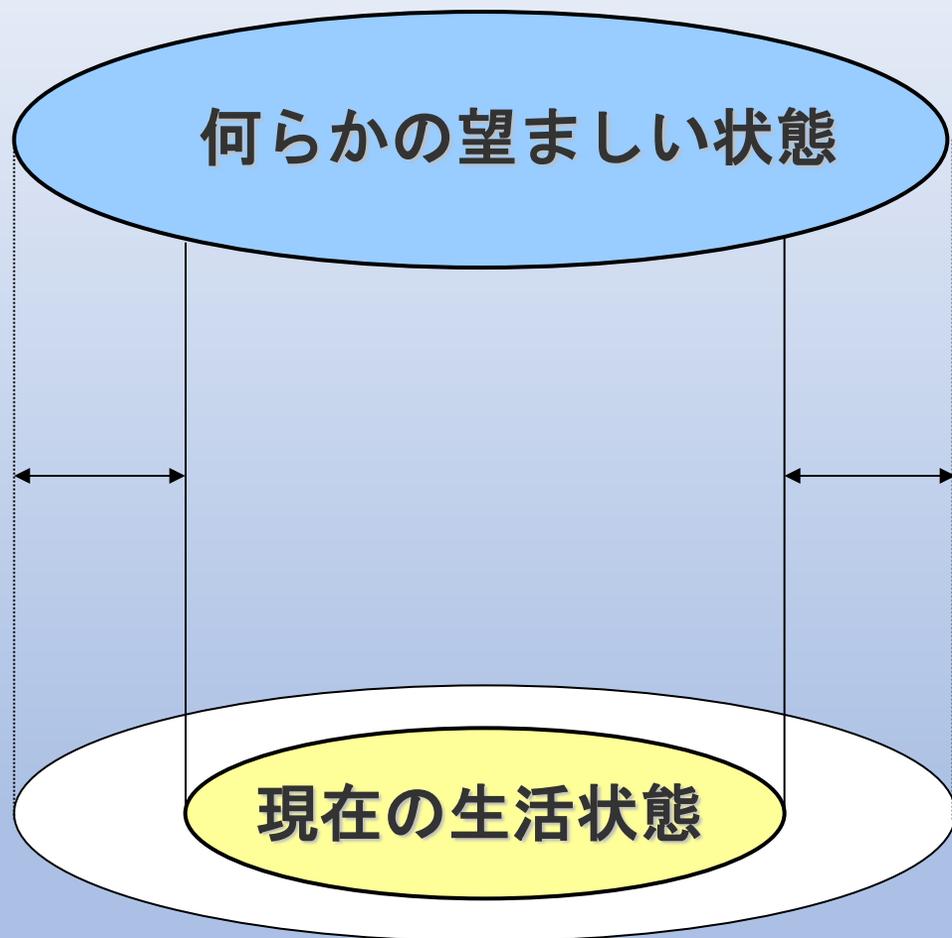
- ①意思形成支援...本人が意思を形成することの支援
- ②意思表示支援...本人が意思を表明することの支援
- ③意思実現支援...本人が意思を実現するための支援

(厚生労働省2018「認知症の人の日常生活・社会生活における
意思決定支援ガイドライン」)

* 「点」ではなく「線」で

- ・意思決定を日常生活場面における選択肢の提示でOKと短絡的に捉えるのはNG。
- ・人生の大きな岐路における決定にしても、その地点が「点」としてあるのではなく、そこに至るまでの過程があり、その後の展開があるので、
紆余曲折を伴う「線」のなかの「点」

本人の最善の利益



ニーズ

価値判断

望ましい状態
(=ニーズが充足された状態) を設定

欠けているもの (=ニーズ) は何か

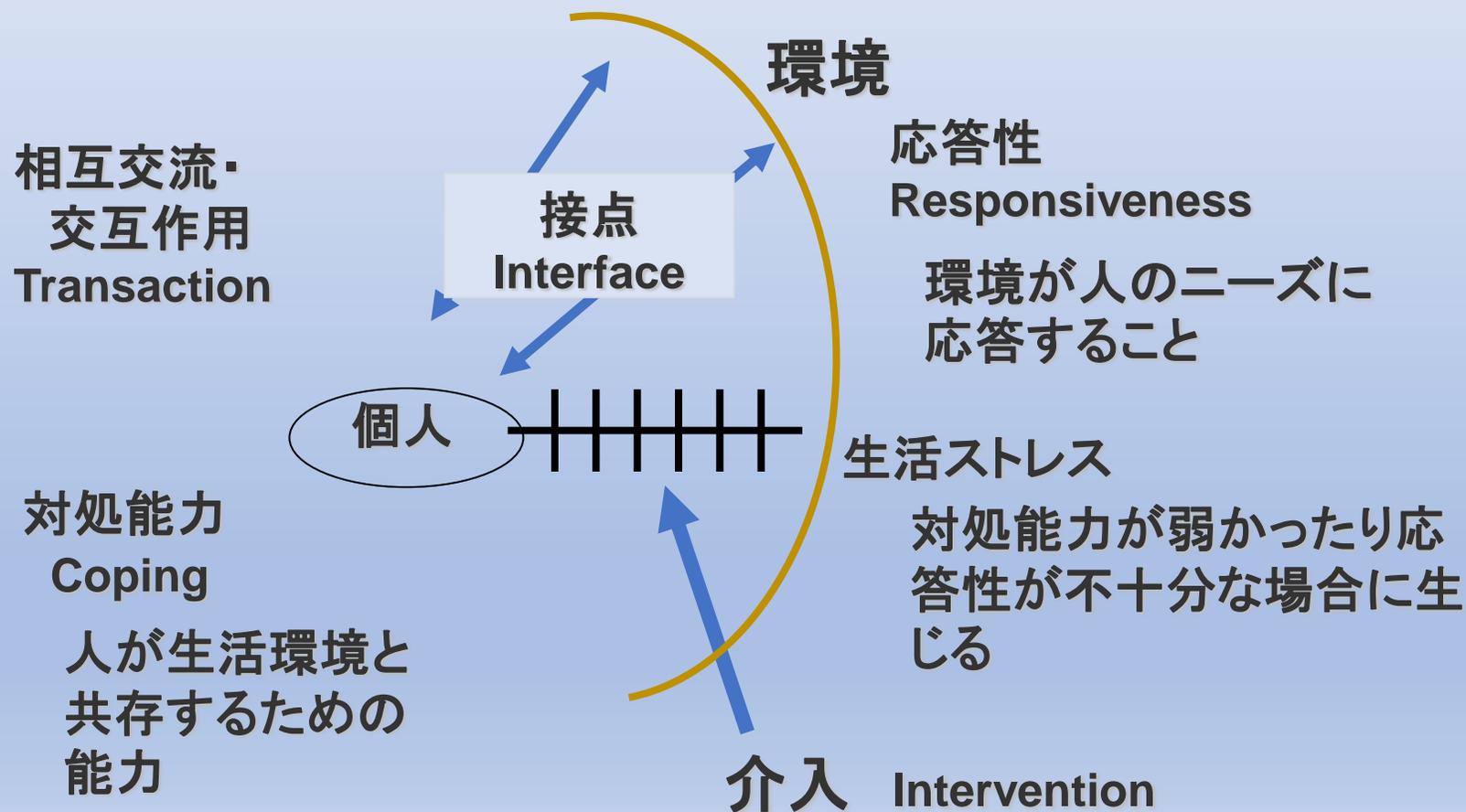
どのようにニーズを充足するのか)

協議 (話し合い)

本人に寄り添いながら (伴走型) 最善の利益を探る

アセスメントの考え方（状況の中の人）

エコロジカルな（生態学的な）捉え方



スウェーデンにおける2つのサポートの形態の比較

Table : A comparison between the two traditions of support

Level	Institutional ⁺ tradition ⁺	Community tradition
Cultural	Competence perspective ⁺	Citizen perspective
Organizational	Special institutions ⁺	Generic services
Individual	Separation	Participation

(Kent Ericsson, 2002)

実践の方向は？

- まず、利用者をひとりの地域住民として理解すること。その上で「地域でのあたり前の生活を支援する」という観点に立つこと。
- すると、支援のステージを施設内ではなく、地域社会に求めることになる。
- そこでは、利用者のあたり前の社会生活体験を重視することや、社会関係を形成すること、社会的な役割を果たすことができるように支援することなどが問われることになる。
- それは、個々の利用者が地域でいきいきと生活できるような「支援の輪」を形成することでもある。
- また、個々の利用者がいきいきと生活していくことができるような地域社会に変えること、あるいはそのような地域社会を創っていくことでもある。

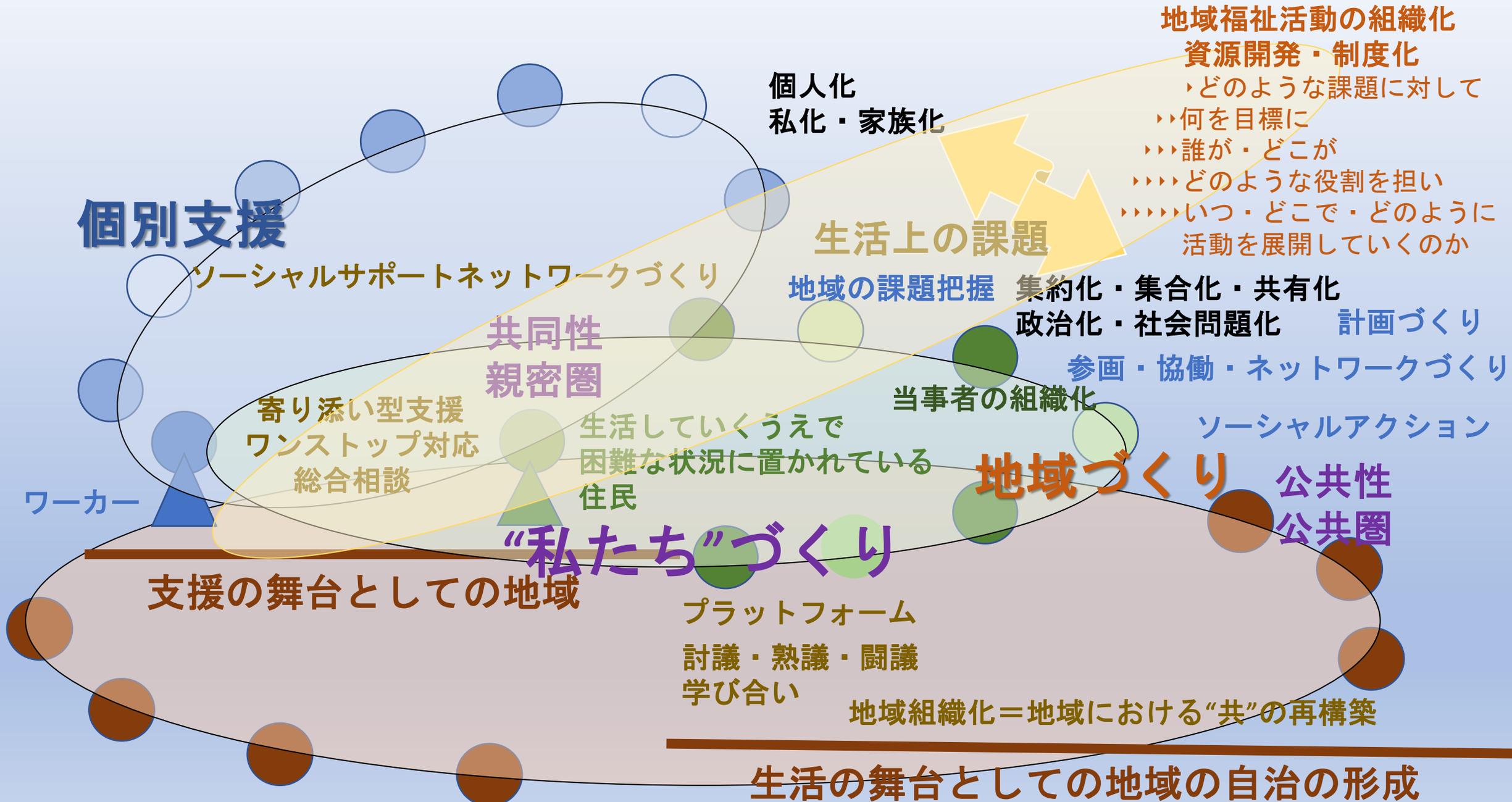
「共生社会」のゆるやかな定義...

「『共生』とは、『あるもの』と『異なるもの』の関係を対象化し、両者を隔てる社会的カテゴリ（社会現象を整序する枠組み）それ自体を、いまあるものとは別なるものへと組み直す現象である。社会のなかにもさまざまな違いがあることを認め、かつそれを前提としたうえでまとまりを志向するさい—すなわちく社会のなかの多様性の尊重>とく社会の凝集性の重視>を両立させようとするさい—、諸個人のなかでそれまで採用してきた認識の枠組みを更新する作用が生じる。

もちろん、そのようにして新たに組み直された認識枠組みもまた、なんらかの排他性を帯びることを避けられないが、その『排他の事実』を認めつつ、暫定的なものとして社会的カテゴリの更新を限りなく重ねていくことが、行為者水準における社会的共生のプロセスである。共生とはこのような継続的行為として進行するものだ」

（岡本智周・丹治恭子編著（2016）『共生の社会学—ナショナリズム、ケア、世代、社会意識—』太郎次郎社エディタス）

個別支援と地域づくりの展開イメージ



つながりづくりは“私たち”と感ずること できる“コミュニティ”づくり

私が私であるためには、

“コミュニティ”への“所属”とそこでの“承認”が不可欠

家庭、学校、職場、友人、サークル、ボランティア、地域など（血縁・地縁・社縁・選択縁...）

私であること（存在）を肯定してくれるコミュニティ
（“私たち”と感ずることができる人たちの集合）が大切

豊かな
人間関係の
形成

つながりづくりは、“私たち”づくり

いきいきと
輝いた
人生

くらしをまもる

×つながりをつくる



(参考：松端克文 (2018) 『地域の見方を変えると福祉実践が変わる
-コミュニティ変革の処方箋-』 ミネルヴァ書房